

日本は間違った方向へ歩んでいる



羽田令子

お茶の水女子大附属幼稚園の志願者、一、五三〇名の「チューセン」の日は、皮肉かどうか「立春の日」。羽田令子さんの十枚（原稿用紙）のこの手紙は、その日に私の園長室に送りとどけられた。

私は「いらいら」と「悲しさ」の中で、その手紙を読んで、一種の「啓示」のようなものを読みとった。「立春」が、いまの日本に精神の問題としてあるのか？ 羽田さん当人の考えがどうかは別として、ともかく、みんなが読んで考えてみるべき日本人の問題が、ここにある、と私は思う。

（周郷博）

二、三日前に降った雪が、山ひだや庭の片すみに残ってはいませんが、きょうは朝からいっばいの太陽、空の青さ、当地は公害のない側の富士山麓、美しい日曜日の朝、突然この便りをしたためる決心をいたしました。

突然の無礼をお許し下さいませ。私、平凡な二児の母、そのなかの下の子のために、貴校の幼稚園を志願した者でございます。

実は、長男の学校の関係で今春上京いたしますので、次男(四歳)にも幼稚園を求めています。その理由や内情は、長男のことから書かなければなりませんので、お聞き苦しいことかもしれません、どうぞお読みになって下さいませ。

三十八年から四十二年にかけて三年余、私どもは、主人の仕事の関係でブラジルに住みました。そこはブラジル北東部にあるレシフェ市、ブラジル文化の発祥地とでも申しましょうか、中世期に繁栄した街で、今でもブラジル第三の都市(人口百万)です。

日本人が非常に少ない関係で、日本にはあまり知られていませんが、南部のリオ、サンパウロにくらべて工業の遅れがあるもので、主人は外務省から派遣されて、技術指導に行っておりまして。その地には頼れるような教育機関は、アメリカン・スクールしかなく、学齢になったとき、その小学部へ入りました。家で両親とは日本語、外でブラジル人の子と遊ぶ時はポルトガル語、さて、今度は学校の門をくぐった途端、第三言語の英語になるわ

けで、心配しましたが、間もなく慣れてくれました。一ヶ月目に担任の教師から「きょう、はじめて、Kちゃんがイングリッシュで私の名を呼んでくれました。うれしかったわ」という報告があった時は、私も共々涙が出そうに嬉しいことでした。その学校は、八割がアメリカ人、あとの二割が日本人その他の、外国人の子弟が在籍しておりました。長男のクラス(一学年一学級)はもちろん、日本人が自分一人、ハイスクールまでで、日本人は私の家庭を入れて計三家庭が子弟を送っていただけです。

ブラジルは想像していたより住みよい国で、人種差別は全くなく親日感ももたれているので、のんびりした毎日でしたが、アメリカン・スクールに入れるに当たって、もしかや、という杞憂がなくはなかったのですが、入れてみてそんな思いは全く消えてしまいました。子どもの順応ぶりを見ればわかります。外人の子らとなんのわだかまりもなく遊びまわっておりまして。一ヶ月間黙っていた子に、「なぜ黙っているの」とか「なぜ英語を話さないのだろう」などと、教師は詰問することなく、はじめて「ミス・〇〇」と呼んだ時、しっかりと受けとめて認めて下さったことはすばらしいことだと思います。

長男は南国の太陽をいっばいに受けて、真っ黒く丈夫に育ち、帰国いたしました。主人は会社に戻り、すぐに任地の静岡県の名湖畔の工場へ勤務、子どもはそこの小学校へ編入いたしまし

た。アメリカン・スクールでは一年を終わり、もう一期、言語を完全マスターするために、一年をくり返しておりました。そのため私たちは、一年下げて編入を希望したのですが、学校の都合もあってか年齢相当の学年（当時、二年の後期）へいきなり入れられました。

わずかに三年余りだけなのに、日本語は二世のようになってしまい、私も、アメリカン・スクールに慣れさせるため、無理に日本語を教えるはいけませんでしたので、ひらがなをたどたくしく読む程度の学力でした。かてて加えて、はじめて見る日本の学校、「気をつけ、礼」からして知らない習慣、あちらでは、小学校低学年はやさしすぎるほど、くり返しくり返しやっている教育内容なのに、毎日どんどん飛躍していく教育方法、子どもには何もかもショックで大変のようでした。

二年弱で現在の所に主人が転任になったので、転校の際、思いきって空白の分、二年下げて編入させていただきました。あちらでは、留年や飛び級は自由でしたので、年齢は揃ってはならず、机やいすが、子どもの体格に合わせて、高低さまざまでしたほです。が、日本の文部省のように、年齢で学年を区切り、出来ようが出来なからうがどんどん押し出していきやり方には、長男の場合、私も両親としまして、どうしても当てはめたくありません。

さて、帰国してもう三年もたちましたが、当時、いたずら帳へアルファベットを並べていた子が授業に追いついていけるほどになり、出発を遅えて日本の子らにごした息子としては、格段の進歩と思いますが、その反面、いつの間にかすっかりゆううつな子になってしまいました。熱帯の太陽の下で、美しい大西洋で、元氣いっぱいだった我が子、帰国の時、あちこちの空港で外人のおばさん、おじさんに「ぼく、日本へ帰るんだよ」と英語でそのうれしさを語っていた子、飛行機の中では、白人、黒人を問わずすぐ誰とも仲よしになり、長い道中、退屈せずに、楽しく過ごしてきた子、あの姿とはうらはらな状態を見るにつけ、私の心も真暗でした。

原因はいろいろあります。その一番大きな原因は、おそらく学校が楽しくないこと、だからでしょうか。いきなり二年後期へ入り、すぐに三年に進級、帰宅は割合遅く、帰れば重い宿題（先生と相談して軽くしてもらってはいましたが、それでもあの子のベースでは負担でした）、ほとんど遊ぶ時間などありませんでした。学校ではテスト、テストの連続、子どもたち同士、点数を気にし、先生も長男に「もう慣れてもよいくらなの」と欠点を拾い、いつの間にか、長男にとって、日本の学校とは恐ろしい所、というイメージがこびりついてしまったようです。

今まで内外を通じて転校を重ねたため、計六人の先生に受けも

たれておりますが、貴重な体験のおかげで、平凡なこの母親の私に、教育とは何か、というものに対して机上では得られなかった、具体的な答を引き出すことができそうです。そして次のような考えを抱くようになりました。

一、子どもにとって教育の場は楽しい経験の場であること。そのためには、子どもの発達段階に応じて行なわれなければならないと思います。また、詰め込み主義、おしつけ主義でなく、子どもの興味や発達をひき出し、助長するような方法で行なわれなければならないと思います。

一、教師は子どもに愛情をもつこと。そのためには信頼することです。（言語が通じなくても愛情で教師と子どもは結びつきます。）ある時は子どもの線にまで下りて、物事を考えたり、学んだり、教えなければならぬでしょう。いかなる時でも、愛情と信頼を失わないことです。そうすれば「なぜ、わからないの、どうして」「なぜできないの」などという馬鹿げた質問をしなくなりません。

一、教師の人格は円満でなければならぬ。

私は教育技術にすぐれた教師よりも、まず、その人となりを優先します。いくら壇上でうまい教師でも、愛情に欠けた所があったり、狡猾な所が見えたり、へつらったりするような人格では何もありません。むしろ、少々教え方は下手でも、心の優しい先生

の方が、子どもがしたうでしょう。

そのためには教師となる人は、円満な教育を受けなければならないわけで、ペーパー・テストができただけで卒業してきたり、ガツガツして過ごしてきた人が教師となるのは真つ平です。大学へ入ってこそ、きびしい学問をしなければなりませんし、精神的にももっと豊かに過ごしていただきたいと思います。（こうなること、また教育論に戻り、教育とは……云々を第一歩から考えていかなければなりません……）

かように母親として得た体験からさえ、教育に抱く考えは尽きないものになりました。このような考えをめぐらしていた矢先（昨秋）主人の本社転勤が四十六年度中にあることが確実にわかりましたので、昨秋は折ある度に上京し、私は長男に合った学校をさがして歩きました。そうして、ある学校で私の考えを聞いていただき、子どもを受け入れていただく段になりました。子どもに対して、暗い少年時代を送らせたくない、子どもは子どもらしく過ごさせたい、せめて小学校時代だけでも楽しい日々が送れるように、私の願いは、切なるものがございます。

主人の転任は今年半ばになりそうなので、私たちは先に上京の子定、桜の咲く新学期から区切りよく転校させたいと思います。ところで下の四歳の子の幼稚園を年が明けてから真剣に考え出

し、さがしましたが、なんとこの人口過剰な日本では、幼稚園から狭き門、私立は皆、十一月に募集を終わっていることを知りました。そこへ偶然貴校の募集を知り、応募しましたわけでございます。受付へ行ってさらにびっくり、時間びったりにかけつめた私よりも先に、大ぜいがひしめき待ちかまえていたではありませんか。

文部省の悪口をいっておきながら、文部省の管轄下にある学校へ志願しているわけですが、私は、前に先生の著書を読んだことがあり、さわやかな印象をもっております。また、長男が在学している町立のような学校と違い、上からの命よりも、園長先生の考えが反映した独得の線を歩んでいるのではないかと、私は考えをめぐらしております。とにかく、私が次男を送りたい学校は貴校しかありません。

受付で、教育ママたちの中に並んで、私にはもっと切実な願いがありました。それは、稚拙ではありますが、今まで走り書きしてきた願いをこめて、次男に貴校を求めております。が、受け入れていただくことはなんとほかない望みでしょう。抽選に当たらなければダメなのです。それに昨夜からわが子は風邪で熱を出して寝込んでいます。もし、明日中に治らなければ、私は上京不可能になってしまいます。私の子どもは、判で押したように、きちんとした子ではありません。わんぱくで、面白い子で

す。でも人の話はよく理解できません。顔が優しい顔つきなので、いくら黒っぽい服を着せても女の子に間違えられることがあります。先日もし知り合いの奥様が優しく、「あなたおじょうちゃん、それとも男の子？」と聞いたら、「バカ、男だ！」と男らしい返事で、皆を笑わせました。

この子が貴校の抽選にはずれたら、上京しても（下落合転入予定）、四歳という貴重な年齢をぶらぶらしていなければなりません。（もう他の幼稚園もいっぱいなのですから）。

私は外国かぶれしてきたわけではありませんが、日本の社会のしくみは何とゆがんでいることでしょう。日本は間違った方向へ歩んでいるとしか思えません。

以上僭越ではございますが、我が子を貴校へ志願した母親としての願いを、先生に聞いていただきたく、急ぎよペンをとりました。清書をする時間もございますので、このまま投函します。乱筆をお許し下さいませ。

誰よりもまして強く、わが子をよい経験の場へ送り出したいことを願ってやみません。

羽田 令子

周郷 博先生